

御 塩 藏 場 跡

—三陸縦貫自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う事前調査—

平成12年11月

宮城県河南町教育委員会
建設省東北地方建設局

御 塩 蔵 場 跡

—三陸縦貫自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う事前調査—

発刊の辞

平成3年の御塩蔵場跡調査報告書刊行に引き続き、今回、その後の調査成果をまとめた続集が刊行されるに至ったことは、大変喜ばしいことであります。

江戸時代を通じて、北上川が内陸交通の重要な役目を果たしていたことは歴史上の事実であり、最近は、中学校や高等学校のクラブ活動や校外学習でも調査研究が行われ、郷土への興味関心を高める大きな役目を果たしている事は大変好ましいことであります。

そのような時に、行政や研究の立場にある人達が、更に専門的な立場から客観的な新資料の発見や調査研究の成果をまとめて、世に出すということは意義あることであります。

鹿又の天王橋付近にある「御塩蔵場跡」についての調査研究は、平成2年に河南町教育委員会によって第1回日の発掘調査が行われて以来、今回の2回目も三陸縱貫自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う調査として、当町教育委員会の調査専門職員によって行われました。

発掘調査の結果としては、御塩蔵場跡がほぼ判明したことと、当時の日常生活に使われていた道具類の若干の破片が発見されたこと、更に時代が明確になり、これらのことから、今まで交通の要衝と言っていたことが科学的に実証されたことであると思われます。

鹿又の御塩蔵については、封内風十記や風土記御用書出、更に代々御塩蔵の御升取（塩の計量係）となっていた斎藤家の古文書等によって、塩蔵は8棟であり、その蔵には、桃生、牡鹿、本吉、氣仙ばかりか豆理郡の塩も保管されていたとか、塩ばかりでなく麦、大豆、米等も扱っていたことが知られております。更にこれらの穀類の相場や仙台藩の軍役の服装等日常の出来事についても詳しく記載されているとのことから今後益々研究が深められ、歴史に興味関心のある人達ばかりでなく、より多くの人達に郷土の歴史を知っていただければと願っています。

今回の発掘調査は、御塩蔵8棟の中のごく一部の御塩蔵跡の調査であり、今後、更に調査研究が深められる必要があると思われます。

ともあれ、今回の調査研究によって解明された諸事実から、鹿又の御塩蔵場の存在意義が益々クローズアップされ、わがふるさと河南町の歴史認識を更に深め、先人の営みにおもいをいたし、河南町を愛する人が一人でも多くなることを祈念しております。

最後に発掘調査に携わってくれた方々、特に発掘後の細かい出土品の記録や整理に従事された方々をはじめ、多くの関係者の皆さんに心から謝意を表し、発刊の辞といたします。

平成12年11月

河南町教育委員会

教育長 斎 藤 龍 雄

例　　言

1. 本書は、建設省東北地方建設局仙台工事事務所による二陸復興自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された調査の報告書である。

2. 発掘調査は、次の要項で実施した。

〔遺跡名〕 御塙藏馬跡（遺跡番号：69051）

〔所在地〕 宮城県桃生郡河南町鹿又字石合地内

〔調査対象面積〕 3,400m²（測量面積：約2,200m²）

〔調査期間〕 平成11年2月5日～平成11年2月6日（確認調査）

平成11年7月16日～平成11年10月22日（事前調査）

〔調査主体〕 河南町教育委員会

〔調査員〕 河南町教育委員会社会教育課 主担当社会教育主事 中野裕平

3. 調査指導　： 宮城県教育庁文化財保護課

4. 発掘調査にあたり、次の方々から指導・協力をいただいた（敬称略）。

〔発掘調査〕 宮城県教育庁文化財保護課：真山治、阿部博志、村田晃一、山田晃弘、天野順輔

久本町教育委員会：佐藤敏幸（遺物整理も）

〔遺物整理〕 仙台市博物館：佐藤　洋

石巻市教育委員会：芳賀英実、木暮亮、阿部篤、古澤亜希子

石巻市議会：岡道夫

石巻文化センター：庄司恵一

5. 調査・整理参加者：伊藤とも子、川田久美子、丹野幸子、樋口孝一、樋口忠宗、樋口泰江、松原勇太

6. 陶器・磁器の産地・器種・年代については、仙台市博物館 佐藤　洋 氏に鑑定していただいた。

7. 報告書作成にあたっては、次の者が作業を分担した。

〔遺物実測〕 川山久美子、中野裕平

〔遺物トレース〕 川山久美子、丹野幸子

〔遺構トレース〕 伊藤とも子、川田久美子、月野幸子

8. 土層の色調表記については、「新版標準土色帖」10版（小山・竹原：1990.6、日本色研事業株式会社）に準拠し、土性区分は国際土壤学会法の基準を参考にした。

9. 本書の執筆及び編集は、河南町教育委員会社会教育課主担当社会教育主事 中野裕平が担当した。

目 次

発刊の辞	
例 言	
目 次	
I. 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	1
II. 調査経過	7
1. 調査に至る経過	7
2. 調査の方法と経過	9
III. 基本層序	10
IV. 検出された遺構と出土遺物	10
1. 基壇状遺構	10
2. 建物跡基礎石	12
3. 焼面遺構	12
4. その他の出土遺物	12
V. 考察とまとめ	14
引用・参考文献	17
写 真 図 版	19
報 告 書 抄 錄	25

I. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

御塩蔵場跡は、宮城県桃生郡河南町鹿又字石合地内に所在し、JR石巻線鹿又駅の北東約1.5kmにある。遺跡の所在する河南町は面積69.33km²、人口18,169人(平成12年7月31日現在)の町で、宮城県の東部に位置し、石巻市の北西、矢本町の北に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川と合流し、町の北部及び東部を区画しながら石巻湾に注いでいる。

東に標高60~90mの通称須江丘陵、西に麓岳丘陵からつづく標高70~170mの通称旭山丘陵、北に最高所173.9mの和潤山とこれに連なる丘陵を配している。町の中央部には低坦地があり、江戸時代には農業用水確保のため広瀬沼が造られたが、大正10年から昭和3年にかけて干拓されて水田地帯となっている。

石巻平野東部に広く発達した沖積層は、低地を形成し、地形・地質的には海岸地帯と旧北上川流域地帯に区分される(長谷: 1967)。御塩蔵場跡は、旧北上川流域地帯の右岸に発達した自然堤防上に立地しており、標高は2.5m前後である。現況は畑、宅地、荒地、河川敷、道路などである。

本遺跡の地層は、埋没谷が基盤をなし、その上に旧北上川流域地帯の沖積層(下部砂礫層、下部砂・粘土層、中部粘土層、上部砂層、上部砂・粘土層)がある。この中で、上部砂・粘土層は浜堤や自然堤防を形成する層で、自然堤防は、湾曲部の内側で発達する傾向がみられる(滝沢・神戸ほか: 1984.3)。

2. 遺跡の歴史的環境

町内には、御塩蔵場跡の西側に所在する須江丘陵やその西に位置する旭山丘陵などの丘陵部を中心に、多数の遺跡が分布している。これらの遺跡について、時代別にふれてみたい。

旧石器時代の遺跡は、関ノ入遺跡1箇所が確認されている。年代幅は4~9万年前と広いものの、同一層理面上の近接した位置からスクリイバー、剥片、二次加工のある剥片が各1点ずつ発見された(阿部・須田: 1997.3)。先端部が剥片の打撃点の延長線上から横にずれている「斜軸」と呼ばれる中期旧石器時代の特徴をもつものがあることから、確実にこの年代幅の中に収まっているものと推定される。

縄文時代の遺跡は24箇所確認されている。この中で、型式名のわかる土器を出土しているのは12遺跡である。時期の古い遺跡から追っていくと、次のようになる。桑柄貝塚は、カキを主体とした汽水産貝塚であり、前期(上川名II式、大木1式)の遺物を包含する(藤沼・小井川ほか: 1989.3)。

関ノ入遺跡では、前期(大木2式)、中期(大木7a~8b式)、後期の遺物が出土している(中野: 1988.3、中野・佐藤: 1990.3、佐藤: 1993.3)。

朝日貝塚は、ヤマトシジミを主体とした汽水産貝塚であり、中期(大木7b, 8a, 8b式)の遺物を包含する(藤沼・小井川ほか: 前掲)。

小崎遺跡からは、中期(大木8, 9式)、後期、晩期の遺物が採集されている。

須江糠塚遺跡からは、中期(大木9式)の遺物が出土している(高橋・阿部:1987.3)。

宝ヶ峯遺跡は、縄文時代後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標式遺跡として、学史的に有名であり(伊東信雄:1957.3, 松木彦七郎:1919.5, 1919.9, 志間・桑月:1991.11), 中期, 後期(南境式, 宝ヶ峯式, 金剛寺式), 晩期(大洞B, B C, C 1式)の土器, スタンプ状土製品, 石器, 石製品, 骨角器など多数の遺物が出土している。また、遺跡の一部には、オオタニシなどからなる淡水産の貝塚がある(藤沼・小井川:前掲)。

前山D遺跡からは、中期(大木8式), 後期(南境式, 宝ヶ峯式, 金剛寺式), 晩期(大洞C 1式)の土器, 土偶, 土製品, 石器, 石製品が出土している。特に、使用痕跡のない石器, 石器製作時に派生するチップの出土が顕著である。また、トゥールが少なく、多数のたたき石, 未製品の石錐などもある。宝ヶ峯遺跡の南東約250mに位置し、年代的に重複することから、同遺跡との関連を考えられる遺跡である。

前山C遺跡、太田沢遺跡からは、後期, 晩期の遺物が出土している。これら2遺跡は宝ヶ峯遺跡に近接しており、その関連が考えられる遺跡である。

代官山遺跡(佐藤:1993.3), 俵庭遺跡, 大沢A遺跡からも後期(南境式)の遺物が出土している。

外に前山A遺跡・B遺跡、箱清水寺跡遺跡等があり、その多くは、丘陵の麓部で平坦地に接する緩辺や沢をやや入ったところに広がる平坦部や緩斜面に立地する。また、宝ヶ峯遺跡を囲むように、放射状に位置している。しかし、その性格は、貝塚や発掘調査の実施された少数の遺跡を除いては不明である。

弥生時代の遺跡は2箇所確認されている。本鹿又遺跡では、旧北上川の河床から中期(大泉式)の遺物が採集されている。俵庭遺跡からは、土器は採集されていないが、アメリカ式石錐が採集されている。

古墳時代の遺跡は8箇所確認されている。須江糠塚遺跡では、前期(塙釜式期第II B段階)の竪穴住居跡が7軒検出された。いずれも方形を基調としたもので、丘陵尾根上の平坦面に立地する(高橋・阿部:前掲)。

関ノ入遺跡では、前期(塙釜式期第II B～第III段階)の竪穴住居跡2軒と後期(住社式期～栗廬式期)の竪穴住居跡1軒が検出された。前期の竪穴住居跡はいずれも一辺が約3m前後の方形を基調とした小型住居で、丘陵尾根上の平坦面に単独で立地する(佐藤:前掲, 中野・市川:2000.3, ほか)。

前山A遺跡では、前期(塙釜式期第II B～第III段階)の竪穴住居跡が1軒検出された。一辺が約6.5m前後の方形を基調とした大型住居で、丘陵尾根上の平坦面に立地する。

新田A遺跡では前期(塙釜式第II B段階), 鶯の巣遺跡では、前期(塙釜式終末段階)から中期(南小泉式)にかけての土師器が採集されている。後期の遺跡として、代官山横穴古墳群、外に時期不明であるが、高森山遺跡、群田遺跡がある。

奈良・平安時代の遺跡は28箇所確認されている。その大部分は丘陵上に展開されている。須江丘陵では、丘陵の北から南まで窯跡が分布している。須江糠塚遺跡では、奈良時代後半から平安時代初期にかけての竪穴住居跡9軒、9世紀後半から10世紀前半にかけての窯跡6基が検出された(高橋・阿部:前掲)。

昭和62年度から平成8年度にかけて継続的に発掘調査が行われた関ノ入遺跡では、奈良時代から平安時代前半までの竪穴住居跡50軒(国分寺下層式期18軒, 表杉ノ入式期23軒, 不明9軒), 9世紀初頭から10世紀前半にかけての窯跡23基、9世紀代を主体とする粘土探掘坑跡49基、水築坑と推定される土壙8基、10世紀半ば以降と推定される製鉄遺構3基などが検出された(中野・佐藤:前掲, 佐藤:前掲)。

須江瓦山窯跡には、奈良・平安時代の瓦や須恵器を生産した窯跡群がある。瓦の一部は、『続日本紀』に

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	須江城塹遺跡 (塙塚館跡)	集落跡 窓跡、城館	縄文(半)、古墳(前)、 奈良、平安、室町	26	黒沢 A 遺跡	包含地	縄文、古代
2	須江丸山窓跡	窓跡	奈良、平安	27	黒沢 B 遺跡	包含地	縄文、古代
3	池袋田遺跡	包含地	古代	28	箱清水 A 遺跡	包含地	縄文(後)、古代
4	広瀬沼遺跡	包含地		29	箱清水 B 遺跡	包含地	縄文、古代
5	宝ヶ峯遺跡 貝塚	包含地 貝塚	縄文(中～後)、奈良、 平安	30	新清水寺駆道跡	包含地	縄文
6	朝日貝塚	貝塚	縄文(中)	31	小友遺跡	包含地	古代
7	本鹿又遺跡	包含地	弥生	32	高森山遺跡	包含地	古墳、古代
8	桑納貝塚	貝塚	縄文(前)	33	大沢 A 遺跡	包含地	縄文(後)、古代
9	塩野田城跡 (塩塚田館跡)	城館	中世	34	大沢 B 遺跡	包含地	縄文
10	宿原敷跡	城館	中世	35	大沢 C 遺跡	包含地	縄文、古代
11	要害館跡 (館山館跡)	城館	中世	36	夷田館跡	城館	近世
12	武田館跡 (武田屋敷跡)	城館	中世、近世	37	代官山遺跡	集落跡	縄文(後)、奈良、平安
13	柏木館跡	城館		38	桑柄遺跡	包含地	古代
14	小崎館跡	城館	近世	39	新田 A 遺跡	包含地	古墳(前)、古代
15	草川館跡 (草出遺跡)	城館 包含地	縄文、平安	40	新田 B 遺跡	包含地	古代
16	喜多村館跡 (高地谷館跡)	城館	平安	41	代官山横穴 古墳群	横穴古墳	古墳、古代
17	青木館跡 (林光館跡)	城館	中世	42	群田遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良、平安、 江戸
18	新城館跡 (駒立館跡)	城館	中世	43	奈良山遺跡	窓跡	古代、江戸
19	駒場館跡	城館	中世	44	御塙藏場跡	藏跡	近世
20	俵庭遺跡	包含地	縄文(中～後)、弥生、 古代	45	網田遺跡	集落跡	縄文、奈良、平安
21	長者館跡 (長者半遺跡)	包含地	縄文、古代、中世	46	霧の巣遺跡	包含地	古墳
22	間ノ入遺跡	集落跡 窓跡	旧石器、縄文(前～後)、 古墳、奈良、平安、中世	47	前山 B 遺跡	包含地	縄文、古代
23	小崎遺跡	包含地	縄文(中～後)、奈良、 平安、中世	48	前山 C 遺跡	集落跡	縄文(後～後)、奈良、 平安
24	太田沢遺跡	集落跡	縄文(後)、古代	49	前山 D 遺跡	集落跡	縄文(中～後)、奈良、 平安
25	前山 A 遺跡	集落跡	縄文、古墳(前)、奈良、 平安				

第1表 遺跡地名表



第1図 河南町の遺跡

本書に掲載の地図は、鹿児島国土地理院版の承認を得て、同院発行の
1/25,000 地形図を複製したものです。(承認番号 平12東松原502号)

記されている牡鹿郡家あるいは牡鹿柵跡と推定される矢本町赤井遺跡に供給されている(三宅・進藤・茂木：1987.3, 佐藤：1995.3, 1999.3)。平成3年度の発掘調査では土壙29基, 焼土遺構1基が検出された。土壙の中には、粘土採掘坑跡と推定されるものの11基、須恵器甕を横位に埋設したもの1基があった。

代官山遺跡では、8世紀後半と9世紀後半の窯跡が各1基ずつと、8世紀末から9世紀初頭にかけての堅穴住居跡1軒が検出された(佐藤：前掲)。

長者館跡(長者平遺跡)では、一辺約60m前後の方形区画を土界状造構と溝状造構がめぐっている。溝状造構は逆台形の断面形を呈する上端幅約5～6m, 下端幅約1m, 最大深約1.8mの大規模な区画溝で、堆積土から915年に降下した太田田a火山灰を検出した。近接した代官山遺跡から「佛」とヘラ書きされた土師器坏、関ノ入遺跡から仏具を模倣したと考えられる土師器多口瓶・鉄鉢型の須恵器鉢、「佛」と墨書きされた須恵器甕が出土したことより、古代寺院と関係した造構の存在が想定される(佐藤：前掲, 中野・市川：前掲)。

細田遺跡からは、9世紀代の須恵器、土師器(表衫ノ入式)、窯体の一部が採集されている。また、別地点の道路法面と、平成10・11年度の確認調査によって採石工事現場内(現状保存箇所)の斜面に9世紀代の窯跡とそれに伴うと推定される須恵器、表衫ノ入式期の堅穴住居跡5軒などが発見されている。また、窯跡の上部平坦面からは、表衫ノ入式の土師器と前記窯跡よりもやや古い時期の須恵器が採集されている。

以上、須江丘陵上に所在するこの時期の遺跡群は、いずれも須恵器や瓦の生産に係わっており、須江窯跡群として扱う必要がある(佐藤：前掲)。

旭山丘陵側に目を向けると、群田遺跡では、8世紀末から9世紀前半にかけての堅穴住居跡1軒とそれ以後続する9世紀代の堅穴住居跡2軒、堅穴遺構7基、多量の骨片が入った須恵器甕を立位に埋設した土壙1基などを検出した(中野：1993.3)。太田沢遺跡からは9世紀前半ころの堅穴住居跡1軒、灰白色火山灰層を伴う土壙が検出された。また、前山C遺跡、前山D遺跡からは、表衫ノ入式の土師器が出土している。外に小崎遺跡、大沢C遺跡、依庭遺跡などがある。

中世以降になると、須江や旭山の丘陵上など14箇所に葛西氏や長江氏に関連したと推定される城館が築造されている。長者館跡(長者平遺跡)は、金亮吉次の仮屋敷跡(漁政期には小島嘉右エ門の除屋敷跡とも言われる)の言い伝えがある。棘塚城跡(須江棘塚遺跡)は、古代の「中山柵跡」に擬定されたこともあり(清水東四郎：1924.12, 鈴木省三：1924.12)、「仙台領内古城書上」によれば、東西20間、南北16間の規模で、館主は須藤勘解由左衛門であるとしている(仙台叢書：1971)。小規模な平山城の形態を呈しており、空堀が一部残存している。塙野田城跡は東西21間、南北27間の規模で、城主は須藤勘解由左衛門(一説には矢代斎三郎)と伝えられている(「安永風土記」)。小規模な平山城の形態を呈しており、空堀や土壘状造構が一部残存している。夷田館跡は、葛西氏家臣夷田氏の居館と伝えられている(「風土記御用書上」)。多くの城館跡は、小規模な平山城の形態を呈しているが、年代、館主とともに不明である。

また、葛西氏の支配領域と推定される鹿又・須江両地区を中心に、町内には、現在105基(鹿又55基、須江38基、北村8基、和渕3基、広瀬1基)の板碑が確認されている。紀年銘の判読できるものの中で最古は弘安元年(1278)、最新は文明10年(1478)である(佐藤雄一：1986.11, 1997.8)。残念ながら、多くの板碑は原位置を保っていない。これらの中には、特徴的な板碑もある。関ノ入遺跡出土の板碑の大部分は、木炭窯の焚口等を強化するために、複数の板碑を折って燃焼部の側壁などに貼り付けたような状況で出土した

(中野：1994.6)。最も多くの板碑が確認された鹿又地区では、道的(矢袋屋敷合)や本町を中心にその分布が見受けられる。高さ2mを超す大型板碑が3基、1.5~2mの板碑が6基確認されており(佐藤雄一：前掲)，これが本地区における特徴と言える。北村字高寺にある高福寺からは江戸時代元禄期前後の墓碑に軒用された5基の板碑が発見されている。その中には阿弥陀三尊板碑や五輪塔板碑がある。発見地点の西側背後に小規模な平山城の形態を呈した新城館跡があること、「鎌倉権五郎五代」の文字が見受けられること、石巻市湊の多福院に所在する板碑に「高福」という寺院名が刻まれており高福寺自体も中世に存在したと推定されること、江戸時代以前に新城館跡の東側から群田遺跡の西脇を通過して小野(鳴瀬町)に通じる道があったとされることから、深谷荘の領主であった長江氏に関連した中世の世界が想定される。外に、『吾妻鏡』仁治2年(1241)5月10日条に記されている「追入(笈入)」からも鎌倉時代末期の板碑が2基発見されている。以上、町内に現存する板碑は、ほぼ全て「船井石」と呼ばれる粘板岩製である。

さらに御塙蔵場跡の所在する鹿又地区に関する文献上の記述としては、元享4年(1324)6月21日の『尼いくわん山内時業女譲状(山内首藤文書)』に記されている「…ミちのくにもんのうのこをりかのまた志もすへ…」と応永17年(1410)6月11日の『金剛王寺胡銅安置銘(河越山光明寺書出)』に記されている「…奥州桃生郡河候村金剛王寺…」があり(小野寺正人：1986.11)，中世にはこの一帯がムラであったことが窺える。

江戸時代になると、旧北上川や江合川の改修工事が行われ、舟運が盛んになる。平成2年度と11年度に調査された御塙蔵場跡では、基壇状遺構(上面：約400m²)と建物跡礎石、焼面遺構が検出された(佐藤・庄司：1991.3, 本書)。御塙蔵は、桃生・牡鹿・本吉・気仙の海道四郡及び宇多・亘理の両郡から運送された塩を納庫したとされる仙台藩の塩の保管施設である(「風土記御用書上」)。御塙蔵守兼藤家文書「御塙方御用事記」によれば、御塙蔵は延宝2年(1673)に建てられたとされている(佐藤・庄司：前掲)。

群田遺跡からは、主に18・19世紀代の遺物などが出土している井戸跡や建物を区画するような溝があること、「風土記御用書上」に「一、郡田屋敷　式軒」とあることから屋敷跡と考えられる整地面1箇所、墓塚1基が検出されている(中野：前掲)。

外に、小野-広瀬-糠塚-和潤-気仙沼を結ぶ東浜街道や涌谷-前谷地-箱清水-広瀬-石巻を結ぶ涌谷街道と2筋の街道に伴う4箇所の一里塚跡、涌谷街道上の桃生郡と遠田郡の郡境に設けられた鳥谷坂番所跡、瓦や陶器を生産したと考えられる奈良山遺跡や須江瓦山窯跡、仙台藩の財政建て直しの一環として寛文2年~5年(1662~1665)にかけて築造された深谷地方の新田開発に係る用水確保のための広瀬沼(大溜池・大堤)，そこに水を引くための縫入堀、松ヶ窪、長岩堀、新縫入堀の潜穴跡、広瀬沼から鹿又村へ農業用水を引くための糠塚潜穴跡、嘉右エ門堀などがある。

II. 調査経過

1. 調査に至る経過

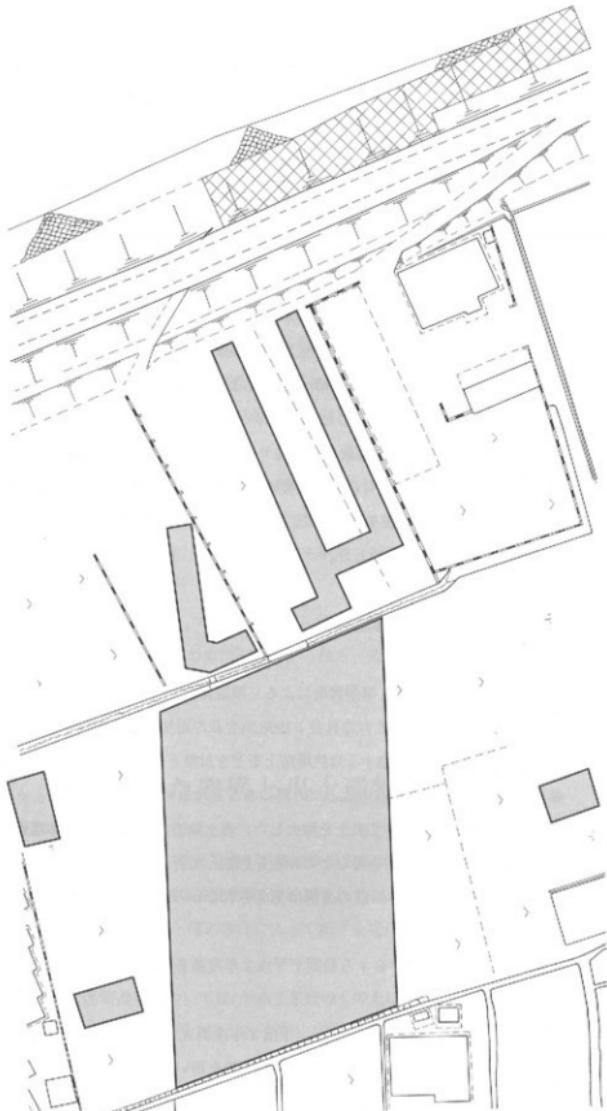
御塙蔵場跡の所在する宮城県桃生郡河南町鹿又は、旧北上川下流域にあり、追波川との分流点に近接し、

流路の内湾部にあたることから自然堤防が発達し、古くからムラが存在した。そのため、対岸との往来の船着場として、また交通の要衝として発達してきた。御塙蔵跡の存在した江戸時代には、松尾芭蕉や脇江真澄も通行したものと推定されている。明治時代以降も主要幹線道路の通過地点として、また仙台・八戸間の三陸沿岸地域を南北に縦走する幹線道路として国道45号線が昭和28年に指定され、今日に至っている。

道路高速交通網を整備して首都圏や東北地方の都市と農村地区を高速ネットワーク化し、地域を活性化することによって経済をより効果的に発展させて多極的な国土を形成することなどを目的とした三陸縦貫自動車道は、宮城県仙台市から岩手県宮古市を南北に結ぶ、全長約220kmに及ぶ建設大臣の指定に基づく

高規格幹線道路(一般

国道の自動車専用道路)である。三陸縦貫自動車道「矢本・石巻道路」施工事業は、建設省東北地方建設局仙



第2図 調査区と周辺の地形

仙台工事事務所(以下「仙台工事事務所」)による宮城県桃生郡河南町鹿又字石合地内における自動車道建設事業である。

平成2年、三陸縦貫自動車道の事業計画に伴い、県教育庁文化財保護課と河南町教育委員会は河南町内の計画路線敷上を踏査した。その結果、計画路線敷内的一部分に周知の埋蔵文化財包蔵地である御塙蔵場跡が含まれることから、事業主体である建設省東北地方建設局と県教育庁文化財保護課、河南町教育委員会が協議を行った。

これに基づき、遺跡の具体的な内容が不明であるため、遺構の有無及び保存状況を確認することを目的として、同年11月、トレンチによる発掘調査を実施した。その結果、いずれも時期不明の基壇状遺構1、建物跡礎石1、焼面遺構1を検出した。

平成10年11月、三陸縦貫自動車道「矢本・石巻道路」建設の未着手分の事業着手に伴い、平成2年度調査箇所とその北側隣接箇所について仙台工事事務所と協議を行った河南町教育委員会は、同年12月、その取扱いについて、御塙蔵場跡の立地箇所が文献による傍証からある程度限定されるであろう旨の意見を付して県教育庁文化財保護課に連絡した。

平成11年1月、県教育庁文化財保護課より発掘調査が必要という回答を得た河南町教育委員会は、仙台工事事務所と協議し、同年2月に北側隣接箇所約1,400m²を対象に確認調査を実施した。

平成2年度と10年度の成果を踏まえ、同年7月、河南町教育委員会は、記録保存を目的とする発掘調査を実施するための活動を開始した。

2. 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、仙台工事事務所による「三陸縦貫自動車道「矢本・石巻道路」施工事業予定地の一部が『宮城県遺跡地図』(宮城県教育委員会:1998.3)登載の周知の埋蔵文化財包蔵地である御塙蔵場跡の範囲内に存在するため、遺跡の立地する自然堤防上などを対象として実施したものである。

確認調査は、基壇状遺構と旧北上川の間にあら荒地を対象として行った。トレンチは6mの間隔を取りながら3m幅で重機を用いて表土を除去した。表土除去に当たっては、御塙蔵場や御塙蔵場に伴うであろう塩の積み降ろし施設や船着場などの存在を想定して行ったが、第二次世界大戦後の旧水田跡とその畦畔・河川堆積物のみで、それ以前の遺構は発見されなかつた。また、遺物は表面採集できず、出土もしなかつた。

これによって、遺構の存在する範囲が平成2年度調査箇所のみであることが判明し、事前調査の範囲が絞りこまれた。

事前調査は、平成11年7月16日から、平成2年度調査対象範囲と工事予定地の重複箇所のほぼ全面について行った。効率的に調査を進めるために、重機を用いて表土を除去した。また、平成2年度の調査では遺物が出土しなかつたため、年代を知るために必要となる遺物の有無についても配慮し、基壇状遺構の推定範囲は人力による精査の上、遺構を確認した。

その結果、基壇状遺構1、建物跡礎石1、焼面遺構1を再度検出した。また、調査区内の全面について、

1／20図で平面図を作成した。作図に当たっては、調査区内のほぼ全面に国家座標のX軸・Y軸をもとに3m毎に測量基準点を設置するとともに、堤防上の4等水準点をもとに調査区脇に基準杭を設けて高さを測量して記入した。同年10年22日までに写真、調査区の全景写真及び文章記録等の記録化を全て完了し、調査を終了した。

III. 基本層序

本遺跡の基本層序は、次のとおりである。

〔I層〕褐色(7.5Y R4/3~10Y R4/4)の粘土質シルト層で、10cm~30cmの厚さで堆積している。軟らかく、やや粘性がある層で、本遺跡の表土である。調査対象範囲の全域に分布する。畑及び旧水田の耕作によつて、擾乱されている。その一部は、第二次世界大戦後の旧水田畦畔となっている。また、平成10年度の確認調査のトレーニングを設定した北側の荒地には、旧水田上に宅地化を目指して近年80cm~100cmほどの盛土した箇所(0層)があった。遺物は、17世紀から明治時代後半までの陶器・磁器が少量出土した。

〔II層〕灰黄褐色(10Y R5/2)のシルト質砂層で、2cm~200cmの厚さで堆積している。河川の堆積土である。調査対象範囲のほぼ全域に分布する。層中には粘土が塊状に含まれている。その中には強い火熱を受けた焼土塊が基壇状遺構の北側で見受けられた。遺物は、17世紀初頭から明治・大正時代までの陶器・磁器が少量出土した。

〔III層〕灰褐色(7.5Y R4/2)の粘土層である。硬く、やや粘性のある層で、上面は酸化鉄によって赤茶けている。基壇状遺構として整地された面で、本遺跡の生活面と考えられる。遺物は、17世紀から19世紀にかけての陶器・磁器が少量出土した。

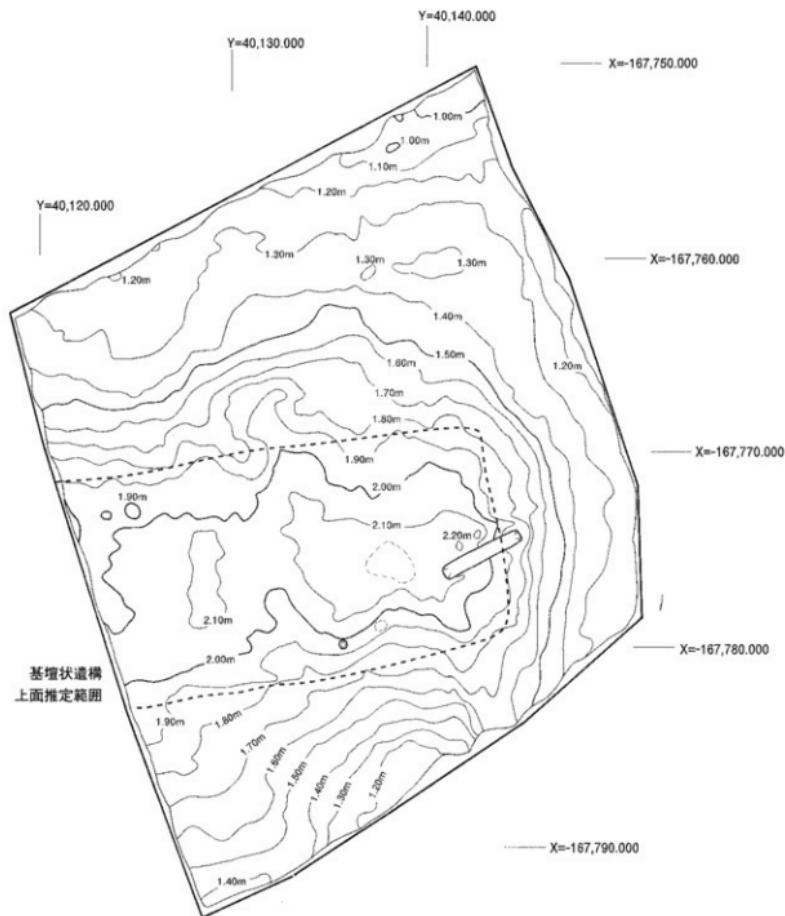
IV. 検出された遺構と出土遺物

発掘調査の結果、基壇状遺構1、建物跡礎石1、焼面遺構1が再度検出された。基壇状遺構の整地面は、予想した面積よりも狭く、「風土記御用書上」や「御塩方御用事記」に記されている御塙蔵が建ち並ぶスペースは想定できない。また、旧北上川の氾濫や水田・畑の耕作によって削平を受け、遺跡の保存状況は極めて悪いことを再確認した。

なお、第4図、第2表、建物跡礎石、焼面遺構については、平成2年度のものをほぼ再掲した。

1. 基壇状遺構

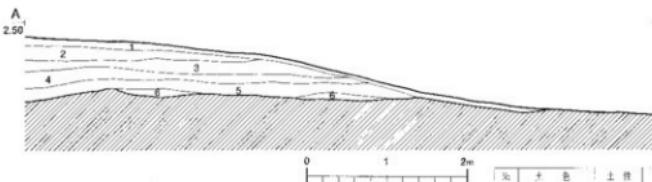
基壇状遺構(第3・第4図)は、調査区の中央やや西寄りに検出された。規模は南北約13m、東西約29mの隅丸長方形を呈するものと考えられる。上面の高さは1.9m~2.1mとはば平坦で、硬い。構造は灰褐色



第3図 遺構配置図

と黄褐色の粘土を積み上げたもので、上端から下端にかけての傾斜はだらだらしている。上端と下端の比高差は1m前後である。

遺物は、遺構の上面にのったあるいは食い込んだ状況で、17世紀から19世紀にかけての施釉陶器(大堀馬・美濃・肥前・唐津)、無釉陶器(常滑?)・磁器(肥前・瀬戸美濃)が少量出土した(第7図1~4)。無釉陶器には布が付着していた。



第4図
基壇状遺構

2. 建物跡礎石

建物跡礎石(第5図)は、基壇状遺構上面から検出された。しかし、保存状況は極めて悪く、礎石が1つと根石のみが残存するもの1つが発見されたにすぎない。両者の間尺は1.83mである。

礎石は、50cm×40cm、厚さ10cm程の大きさの粘板岩である。下部構造は、長軸48cm×短軸33cm、深さ8cmの楕円形の掘り方に径10cm前後の粘板岩を敷き詰めて根石としている。根石のみが残存するものも同様の構造・規模である。

出土遺物も無い。建物跡の規模は不明である。

3. 焼面遺構

焼面遺構(第6図)は、基壇状遺構上面から検出された。平面形は、南北2.84m、東西2.40mの不整梢円形を呈している。その状況から強い火熱を受けたものと考えられる。また、基壇状遺構の北側のⅡ層中に焼土塊が認められたが、本遺構との係わりは不明である。

遺構に伴う遺物は無く、時期は不明である。

4. その他の出土遺物

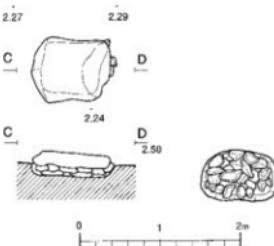
以上の遺構とそれに伴う遺物のほかに、Ⅱ層、Ⅲ層より遺物が出土した。また、表面採集された遺物もあった。

Ⅱ層からは、17世紀から大正時代までの施釉陶器(小野相馬・大堀相馬・瀬戸・美濃ほか)・磁器(肥前・瀬戸・美濃ほか)が出土した(第7図5~9)。

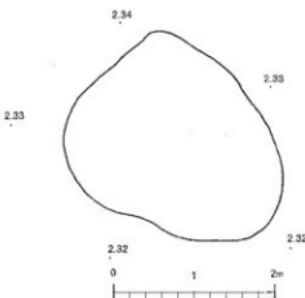
Ⅲ層からは、17世紀から明治時代後半までの施釉陶器(大堀相馬)・磁器(肥前・瀬戸・美濃ほか)が出土し

番号	大色	土性	備考
1	灰褐色SYR4/0	砂 土	上层に礫化層を多量含む。
2	灰褐色SYR5/2	砂 土	少量の砂を含む。
3	黄褐色YTR5/0	砂質粘土	
4	灰褐色SYR5/0	砂 土	少量の砂を含む。
5	灰褐色SYR5/0	砂質粘土	
6	灰褐色SYR5/2	砂 土	

第2表 基壇状遺構土層記表



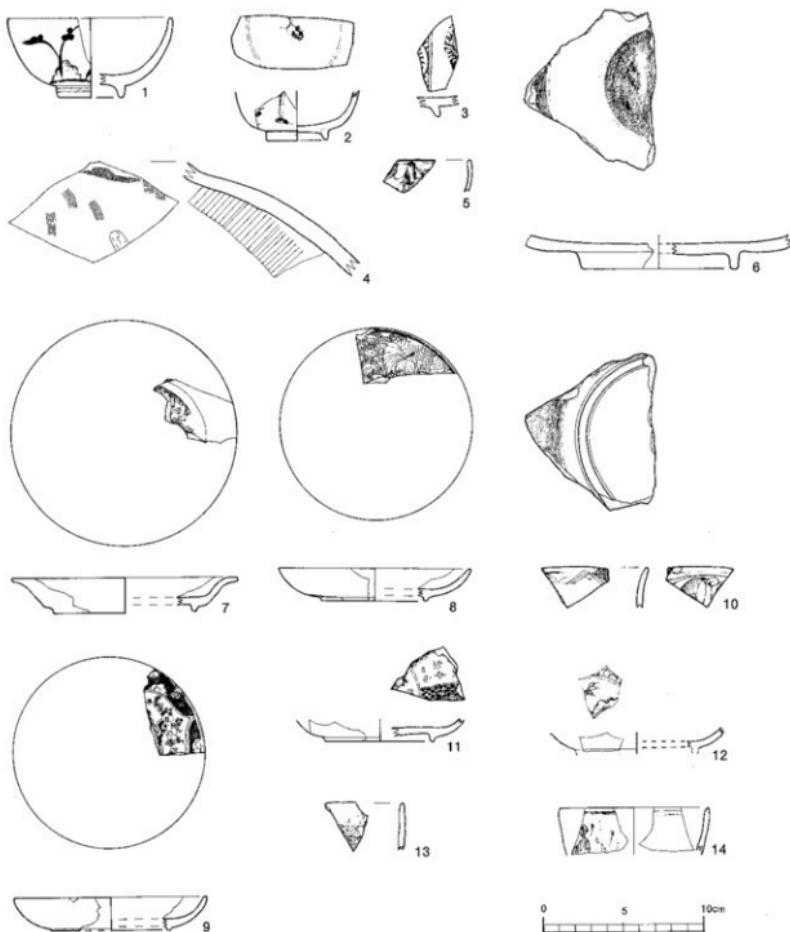
第5図 建物跡礎石



第6図 焼面遺構

た(第7図10~12)。

表面採集されたものとしては、18世紀中頃から20世紀までの施釉陶器(瀬戸美濃・瀬戸ほか)・磁器(肥前・瀬戸美濃ほか)があった(第7図13・14)。



第7図 出土遺物

名	種類	基壇	年	代	特	記
1. 銀器類	三足炉	口徑・底径・高さ(cm)	口径	年代	特	記
2. 銀器類	三足炉	—	3.8	—	肥前	染付、草花文、くらわんか手
3. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付
4. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付、草花文
5. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付
6. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付
7. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付、草花文
8. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付
9. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付
10. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付
11. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付
12. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付
13. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付
14. 銀器類	三足炉	—	—	—	肥前	染付

第3表 遺物観察表

V. 考察とまとめ

今回の調査によって出土した遺物は全て近世以降のもので、基壇状遺構に伴うものと伴わないものに分けられる。

(1) 基壇状遺構

① 出土遺物

基壇状遺構からは、大堀相馬産の碗・皿、美濃産の鉢、肥前産の碗・皿、唐津？産の鉢、常滑？産の窓、瀬戸美濃産の碗・瓶類の14点が出土した。いずれも近世に属するものである。肥前産の染付碗は体部に草花文を有するくらわんか手と呼ばれるもので、18世紀代の年代が与えられる。仙台城三の丸跡Ⅲ期、松山町上野館跡、仙台市養種園跡、仙台市山田条里遺構などに類例が見受けられる。肥前産の皿は蛸唐草文を有し、18世紀後半の年代が与えられる。これら2点は肥前磁器Ⅳ期に相当する。肥前産の透明釉碗は^{註1}18世紀以降の年代が与えられており、肥前陶器のⅣ期またはⅤ期に相当する。大堀相馬産の灰釉碗は^{註2}18世紀代の年代が与えられる。常滑？産の窓は口縁部付近の破片で、布が付着している。美濃産の灰釉鉢は^{註3}18世紀代の年代が与えられており、登窯Ⅷ期～Ⅸ期のものと考えられる。外の破片も全て近世に属するものであることから、基壇状遺構の使用年代は近世であり、御塙蔵場が設置された年代と一致する。

② 性質

基壇状遺構は、灰褐色及び黄褐色の粘土をたたき締めて整地し、平坦面を造り出したものである。その上面と推定される範囲の面積は約400m²、レベル差は20cm前後である。「御塙方御用事記」や「風土記御用書

註1. 肥前磁器のⅣ期については、1690年～1780年代(元禄～天明年間)の推定実年代が当てられている。

註2. 肥前陶器のⅣ期については1690年～1780年代(元禄～天明年間)、Ⅴ期については1780年～1860年代(天明～文久年間)の推定実年代が当てられている。

註3. 「尾張高蔵」の登窯Ⅷ期は1716年～1743年(享保～寛保年間)、Ⅸ期は1744年～1771年(延享～明和年間)、Ⅹ期は1772年～1800年(安永～寛政年間)の推定実年代が当てられている。

註4. 斎藤家文書「御塙方御用事記」には「御塙蔵間数 一、毫番 長八間 横式間半 一、二番 長武拾武間 横式間半 五番 恒三間 式間半…、拾番 七間 式間半…右間数百式拾瓦軒…」と記されており、1間約1.8mとすれば、約1,000m²の建物面積となる。

層位	年代	種別		産地・器種		陶器		器	
		唐津?	美濃?	南丹?	瀬戸?	美濃?	唐津?	美濃?	唐津?
Ⅲ	17C 18C 18C以降 江戸	1	1	1	1	1	1	1	1
Ⅱ	16C末(大崩歿終末)~17C初 17C 18C 19C 年代不明	1	1	1	1	1	1	1	1
表抜	年代不明				1	1			
表抜	18C中頃 江戸 20C 年代不明					1	1	1	1

第4表 出土陶器年代・産地・器種別集計表

層位	年代	種別		産地・器種		磁器		器	
		唐南	肥前	唐南	肥前	唐南	肥前	唐南	肥前
Ⅲ	18C後半 江戸 19C	2	1	1	1				
Ⅱ	17C後半 江戸 19C 19C後半 幕末以降 明治前半 明治後半 明治一大正 年代不明	3	3	1	1	1	1	1	3
I	17C 19C 明治 明治後半 年代不明				1	1	1		4
表抜	18C後半 明治以降 明治一大正 20C		1		1	2		10	4

第5表 出土磁器年代・産地・器種別集計表

註5
上」に記されている御塙蔵場の面積からするとはるかに狭いが、その一部である可能性が考えられる。上面の大部分にはぶい赤褐色に酸化し、厚さ2cm程度の層状を呈し硬化している。灰褐色粘土が本来含有している鉄分が酸化したものと考えられるが、層化していたことより、酸化を促す何らかの要因があったものと考えられる。また、面積の割合からすると出土遺物が少なく、器種構成も碗や皿の比率が非常に高く火鉢や燈明皿のような日用雜器が乏しい。平成4年度に調査した群田遺跡では、居住空間と考えられる整地面とそれに伴う遺構から多數の陶器・磁器が出土しており、器種構成も多様である。このことから今回の出土遺物は、非日常的な居住空間を示唆する資料と考えられる。

今回の調査では雨天が続いたが、この状況でも基壇状遺構上面と推定される範囲においては、冠水することがなかった。基壇状遺構そのものは、灰褐色及び黄褐色の粘土をたたき締めて整地し、平坦面を造り出したものであるから、通常の大雨では冠水しないように考慮して高さが設定されたものと考えられる。

以上より、基壇状遺構は、御塙蔵場跡の立地箇所とは特定できないものの、近世に属する年代の遺構であり、御塙蔵場跡の一部である可能性が考えられる。

(2) その他の遺構と出土遺物

基壇状遺構の外に建物跡礎石と焼面遺構が検出された。建物跡礎石は基壇状遺構の上面から確認されている。基壇状遺構に伴う遺構と考えられるため、基壇状遺構と同じ年代が与えられる。

焼面遺構も基壇状遺構の上面から確認されているが、基壇状遺構上に建物が存在したと考えられること、屋内における焼成施設の他の痕跡が見当たらないことより、強い火熱を受けた焼面遺構は、存在したと考えられる建物よりも新しい時代のもの可能性も考えられる。

上記2遺構から遺物は出土しなかったが、基本層序II層、I層より少量の遺物が出土し、また表面や排水溝からも遺物が採集された。

II層からは、小野相馬窯の皿、大堀相馬窯の土瓶、美濃産の皿・壺類、瀬戸美濃産の碗・皿、肥前産の碗・皿など40点が出土した。各層別の出土点数としては最も多い。美濃(志野)窯の良石釉皿は、大窯V期最終末のものである。大窯V期は16世紀末から17世紀初頭にかけての年代が与えられており、御塙蔵場が建設される以前の遺物である。肥前窯の碗は、いずれも江戸時代のものである。肥前磁器のIV期に相当するものと考えられる。小野相馬窯の青綠釉皿は18世紀代のものである。小野相馬焼は大堀相馬焼と共に作る例が多い。今回出土した資料と同時期の資料としては基壇状遺構より出土した碗や皿が相当する。

I層からは、大堀相馬窯の土瓶、肥前窯の瓶類、瀬戸美濃産の碗・皿・壺類など13点が出土した。肥前窯の瓶類は17世紀代のもので、肥前磁器のIII期に相当するものと考えられる。大部分は明治時代以降のものである。

外に瀬戸产の碗、瀬戸美濃産の碗・壺類、肥前窯の碗など25点が表面採集された。大部分は明治時代以降

註5、「風土記御用書上」には「一、塙蔵八ツ一、東向 長二十二間・幅六間半… 一、北向 長八間・幅二間半… 一、御塙蔵西向 長四間・幅二間 右者延宝元年被相建候…」と記されており、1間約1.8mとすれば、約1,020m²の建物面積となる。

註6、肥前磁器の日期については、1650年～1690年代(承応・明暦～元禄年間)の推定実年代が当てられている。

のものである。

以上のように基壇状遺構以外の出土遺物については、近世に属するものと属しないものの双方が出土している。畑の耕作土として耕起されたりすることにより基壇状遺構上にあった遺物が動いたためと考えられる。近世の遺物の比率は、基壇状遺構100%，II層40%，I層15.4%，表面採集12%と、基壇状遺構より垂直方向に離れるにしたがって低くなる。銅版転写、墨絵、上絵付といった比較的新しい染付技法を用いた磁器は、全てII層より上で出土している。これはII層以上が明治時代以降の生活面であったことを意味すると同時に、基壇状遺構が明治時代より前の生活面であることを意味する。

まとめ

今回の発掘調査により、以下のことがわかった。

- (1) 基壇状遺構は近世の遺構であり、非日常的な居住空間であること。
- (2) 基壇状遺構を御塩蔵の立地箇所と特定できなかったが、文献に記されている御塩蔵の年代と基壇状遺構から出土した遺物の年代は重なること。
- (3) 「御塩方御用事記」や「風土記御用書上」に記されている御塩蔵の建物面積は約1,000m²であるが、今回検出された基壇状遺構上面の面積は約400m²とはるかに狭く、全ての建物が建ち並ぶ面積ではないこと。特に、南北棟が建つには上面の北端から南端までの距離があまりに短いこと。南北棟の立地箇所については今後の検討課題であること。

引用・参考文献(五十音順)

- 阿部博志・須田良平(1997.3)：「北上川下流域における旧石器時代遺跡の分布調査」『東北歴史資料館資料集』40 東北歴史資料館
- 石井政政・柳沢幸夫ほか(1982.2)：「松島地域の地質」『地域地質研究報告』秋山6第89号 通商産業省工業技術院地質調査所
伊東信藤(1957.3)：「古代史」『宮城県史』第1巻 宮城県
- 井上喜久男(1992.5)：『尾張陶磁』 ニュー・サイエンス社
- 大橋康二(1989.1)：「肥前陶磁」『考古学ライブラリー』55 ニュー・サイエンス社
- 小野寺正人(1986.11)：「河南町の中世史料」「わがまち河南の文化財」 河南町教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄(1990.6)：『新版標準土色帖』10版 日本色研事業株式会社
- 河南町(1971.3)：「風土記御用書上」「河南町誌」下 河南町
- 工藤哲司・佐藤洋(1986.12)：「柳生」(松木遺跡)『仙台市文化財調査報告書』第95集 仙台市教育委員会
- 佐久間光平・佐藤憲幸ほか(1993.3)：「上野鉢跡－近世茂庭氏居館跡発掘調査報告書－」『宮城県文化財調査報告書』第156集 宮城県教育委員会
- 佐藤敏幸(1991.3)：「御塩蔵場跡－発掘調査報告書－」『河南町文化財調査報告書』第5集 河南町教育委員会・建設省東北地方建設局

- 佐藤敏幸(1993.3) : 「須江空跡群 代官山遺跡」『河南町文化財調査報告書』第6集 河南町教育委員会
- 佐藤敏幸(1993.3) : 「須江空跡群 間ノ入遺跡－陣営奥湯露地方最大の須恵器生産地－」『河南町文化財調査報告書』第7集 河南町教育委員会
- 佐藤敏幸(1995.3) : 「赤井遺跡－牡鹿構・郡衙擬定地－」『矢本町文化財調査報告書』第3集 矢本町教育委員会
- 佐藤敏幸(1999.3) : 「赤井遺跡－牡鹿構・郡衙擬定地－」『矢本町文化財調査報告書』第10集 矢本町教育委員会
- 佐藤洋(1997.3) : 「夷種園遺跡－伊達家別荘跡の調査－」『仙台市文化財調査報告書』第214集 仙台市教育委員会
- 佐藤雄一(1986.11) : 「6板碑」「わがまち河南の文化財」 河南町教育委員会
- 佐藤雄一(1997.8) : 「河南町の板碑」『平成9年度河南町歴史大学』レジュメ 河南町教育委員会
- 志間春治・桑月眞(1991.11) : 「宝ヶ峯」 岩瀬総合会議室
- 清水東四郎(1924.12) : 「中山橋跡(住景山)(桃生郡史跡)」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書』2
- 鈴木省三(1924.12) : 「中山橋」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書』1
- 高橋守克・阿部忠(1987.3) : 「須江糖塩遺跡」『河南町文化財調査報告書』第1集 河南町教育委員会
- 鴻沢文教・神戸信弘ほか(1984.3) : 「石巻地域の地質」『地域地質研究報告書』秋山(6)第90号 通商産業省工業技術院地質調査所
- 田中則和・主浜光朗ほか(1984.2) : 「山口遺跡II－仙台市体育館建設予定地－」『仙台市文化財調査報告書』第61集 仙台市教育委員会
- 中野裕平(1988.3) : 「須江閑ノ入遺跡詳細分布調査報告書」『河南町文化財調査報告書』第2集 河南町教育委員会
- 中野裕平・佐藤敏幸(1990.3) : 「須江閑ノ入遺跡－工業団地造成に伴う発掘調査概報－」『河南町文化財調査報告書』第4集 河南町教育委員会
- 中野裕平(1993.3) : 「群山遺跡」『河南町文化財調査報告書』第8集 河南町教育委員会
- 中野裕平(1994.6) : 「折損された板碑」六軒町中世史研究 第2号 東北学院大学中世史研究会
- 中野裕平・市川洋一(2000.3) : 「閑ノ入遺跡－長者館跡－須江山湧水場配水池建設(増設)工事に伴う事前調査－」『河南町文化財調査報告書』第10集 河南町教育委員会
- 藤沢敦・関根達人ほか(1994.3) : 「東北大隈蔵文化財調査年報」7 東北大隈蔵文化財調査研究委員会
- 藤沢敦・関根達人ほか(1997.3) : 「東北大隈蔵文化財調査年報」8－仙台城二の丸跡第9地点の調査－ 東北大隈蔵文化財調査研究センター
- 藤沢敦・関根達人ほか(1998.2) : 「東北大隈蔵文化財調査年報・仙台城二の丸跡」9 東北大隈蔵文化財調査研究センター
- 藤沢敦・関根達人ほか(1998.3) : 「東北大隈蔵文化財調査年報」10 東北大隈蔵文化財調査研究センター
- 藤沢敦・関根達人ほか(1999.2) : 「東北大隈蔵文化財調査年報・仙台城二の丸跡」11 東北大隈蔵文化財調査研究センター
- 藤沢敦・関根達人ほか(2000.3) : 「東北大隈蔵文化財調査年報・仙台城二の丸跡・仙台城二の丸北方武家屋敷跡」13 東北大隈蔵文化財調査研究センター
- 藤沼邦彦・小井川和夫ほか(1989.3) : 「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25 東北歴史資料館
- 松本彦七郎(1919.5) : 「前田国宝ケ峯遺跡の分層的小发掘経緯」『人類学雑誌』34の5
- 松本彦七郎(1919.9) : 「宝ヶ峯遺跡について」『考古学雑誌』第9卷第9号 日本国考古学会
- 宮城県教育委員会(1998.3) : 「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第176集 宮城県教育委員会
- 三宅宗義・進藤秋輝ほか(1987.3) : 「赤井遺跡第1次発掘調査報告」『矢本町文化財調査報告書』第1集 矢本町教育委員会
- 結城慎一・佐藤洋ほか(1985.3) : 「仙台城三の丸跡」『仙台市文化財調査報告書』第96集 仙台市教育委員会
- 渡部弘美(1993.3) : 「仙台平野の遺跡群X II Ⅱ. 発掘調査報告－山田条里遺構－」『仙台市文化財調査報告書』第170集 仙台市教育委員会
- (1971) : 「仙台領内古城古上」『仙台叢書』別巻
- (註) 編著者名の記載については、日本国内の図書館における一般的な図書目録の記載方法に従い、同一図書における編著者(または団体)が2人までの場合は氏名(または団体名)全て、3人以上の場合はその図書を代表する2人の氏名のみの記載とし、3人以上からは「ほか」の扱いとした。

写 真 図 版



図版 1-1 調査区遠景



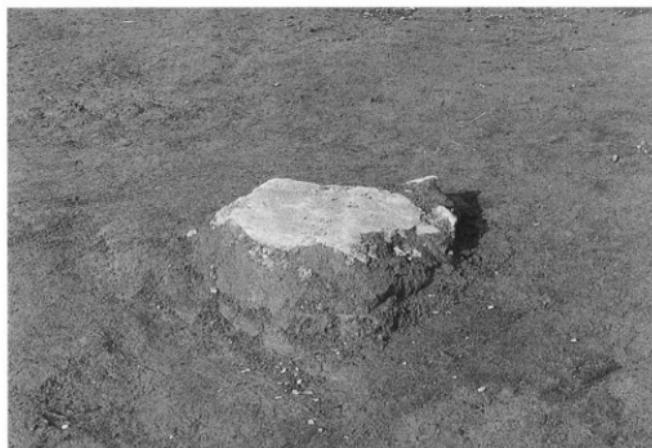
図版 1-2 確認調査



図版 1-3 作業風景



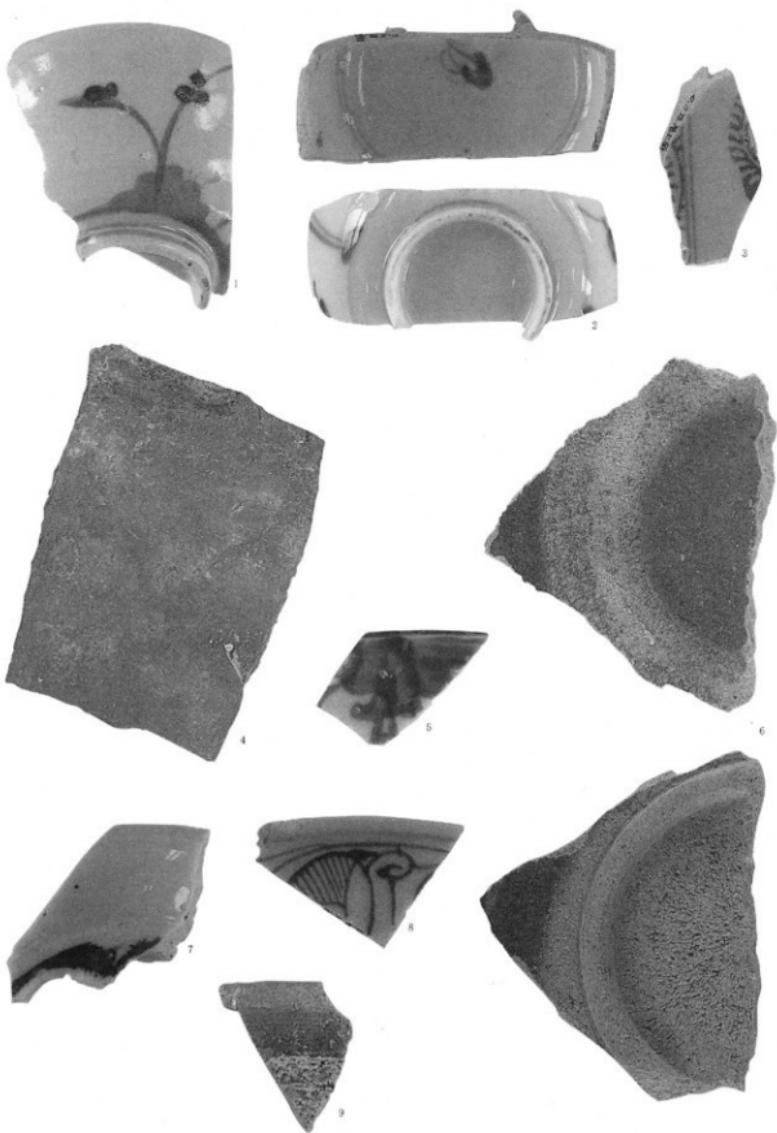
図版 2-1 調査区完掘状況
と基壇状遺構



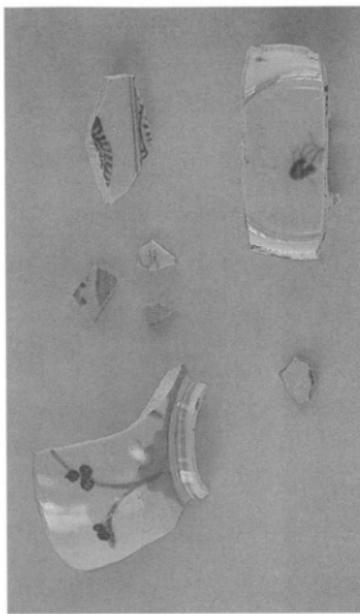
図版 2-2 建物跡礎石



図版 2-3 磨石根石



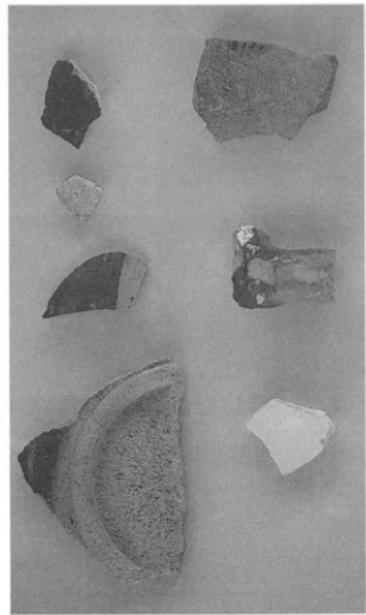
図版3 出土遺物



图版 4—1 基堆状遗構出土遺物 (陶器)

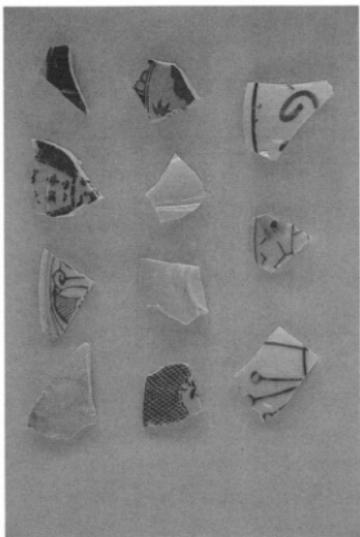


图版 4—2 基堆状遗構出土遺物 (磁器)

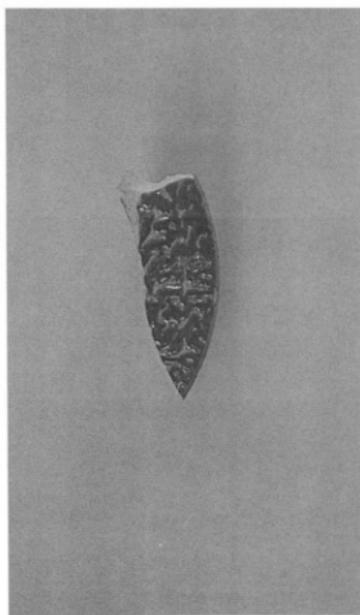


图版 4—3 II 层出土遺物 (陶器)

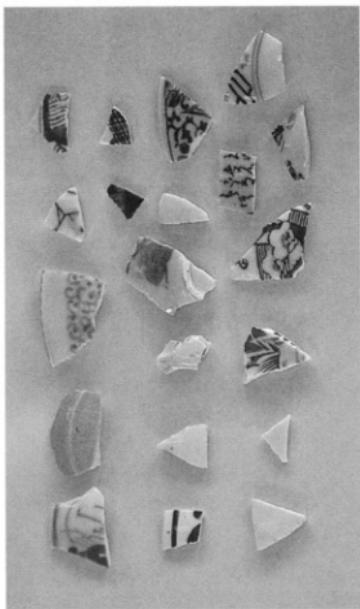
图版 4—4 II 层出土遺物 (磁器)



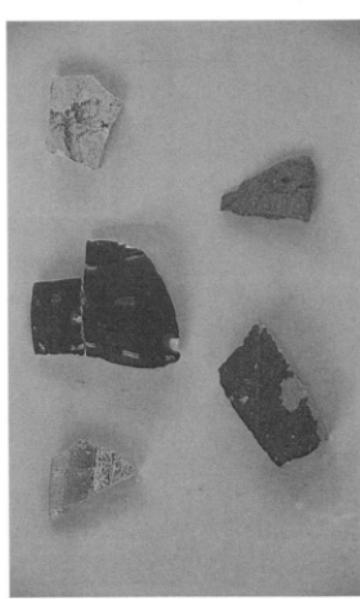
图版 5—1 1 层出土遗物 (陶器)



图版 5—2 1 层出土遗物 (磁器)



图版 5—3 表面采集遗物 (陶器)



图版 5—4 表面采集遗物 (磁器)

報告書抄録

ふりがな	おしおくらばあと					
書名	御塩蔵場跡					
副書名	三陸縦貫自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う事前調査					
卷次						
シリーズ名	河南町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第11集					
編著者名	中野 裕平					
編集機関	河南町教育委員会					
所在地	宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前7番地					
発行年月日	平成12年11月10日					

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おしおくらばあと 御塩蔵場跡	みやぎけんものう 宮城県桃生 ぐんかなんちゅうかの 郡河南町麗 またあざいしいいち 又字右合地 ない内			38°	141°	平成11年2月5日	約3,400 m ²	建設省東北地方 建設局仙台工事 事務所による三 陸縦貫自動車道 「矢本・石巻道路」 施工によって埋没する部分 の調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
御塩蔵場跡	藏跡	江戸	基壇状遺構	陶器・磁器				

河南町教育委員会文化財関係出版物

〔わがまち河南の文化財〕昭和61年11月 P.1~201

〔河南町文化財調査報告書〕第1集「須江塙塙遺跡」昭和62年3月 P.1~110(在庫なし)

〔河南町文化財調査報告書〕第2集「須江閣ノ入遺跡詳細分布調査報告書」昭和63年3月 P.1~27(在庫なし)

〔河南町文化財調査報告書〕第3集「須江閣ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ」平成元年3月 P.1~25(在庫なし)

〔河南町文化財調査報告書〕第4集「須江閣ノ入遺跡・工業団地造成に伴う発掘調査概報」平成2年3月 P.1~67(在庫なし)

〔河南町文化財調査報告書〕第5集「御塙藏跡－瓦張調査報告書」平成3年3月 P.1~21(残部僅少)

〔河南町文化財調査報告書〕第6集「須江塙跡群 代官山遺跡－奈良、平安時代の須恵器生産遺跡」平成5年3月 P.1~108(残部僅少)

〔河南町文化財調査報告書〕第7集「須江塙跡群 関ノ入遺跡－陣営海道地方被人の須恵器生産地」平成5年3月 P.1~230(残部僅少)

〔河南町文化財調査報告書〕第8集「春田遺跡」平成5年3月 P.1~72

〔河南町文化財調査報告書〕第9集「春田遺跡Ⅱ」平成10年3月 P.1~18

〔河南町文化財調査報告書〕第10集「関ノ入遺跡・長者館跡－須江川淨水場配水池建設(増設)工事に伴う事前調査」平成12年3月 P.1~52

〔河南町文化財調査報告書〕第11集「御塙藏跡－三陸鐵道自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う事前調査」平成12年11月 P.1~26

河南町文化財調査報告書 第11集

御 塙 藏 場 跡

— 三陸鐵道自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う事前調査 —

平成12年11月16日 印刷

平成12年11月16日 発行

発行 河南町教育委員会

〒987-1101 宮城県仙崎9、郡河南町前谷地字黒沢前7番地

TEL 0225(72)2111

印刷 株式会社 七星社

〒986-0036 宮城県石巻市南光町一丁目220-1

TEL 0225(22)3101㈹

